

〈酒寄雅志先生を追悼する〉

酒寄先生をしのんで

酒寄先生は昭和61年に本学日本史学科の開設と同時に赴任され、現職本学教授のまま令和三年十二月八日に逝去されました。三年度秋 semester の授業まで担当され、五回ほど講義が進んだところに、病状が悪化し治療に専念されることとなりました。令和二年度より体調は思わしくありませんでしたが、日本文化学科長のお仕事もされ、コロナ禍にあつては危機管理委員会
の座長として、コロナ対策の陣頭指揮をとっておられました。まさに本学の大黒柱であり、それが突如として失われたということになります。

先生は日本史学科長を二期四年、日本文化学科長を三期七年つとめられ、FD委員会委員長ほか、さまざま

まな委員会でも重要な役割を果たされました。ことに本学の学科再編にあたっては将来構想委員として、また学科長として様々な苦難を乗り越えて本学を新しいかたちへと導かれました。

本学所管の博物館である参考館の館長も長らくおつとめになられ、ことに「斯花会」(同窓会)の幹事長でもあつた関係で、丸木俊氏の絵画の受け入れに尽力されました。収蔵庫の敷設や絵画の修復などに奔走されていた姿が思い出されます。ともかく良かれと思われたことは、万難を排して進まれる熱血漢であり、さらには教員用パソコンの導入や、学内のバリアフリー化、サーマルカメラの設置など、その先見性に間々驚

かされました。

学外でのご活躍も枚挙にいとまなく、略年譜にからだ栃木県・栃木市・小山市など自治体でも、その行動力と知識、人脈を遺憾なく發揮されておられます。それは気さくなお人柄と、地域に貢献するという強い責任感のなせるところであったと思われまます。

若い頃には流鏝馬をされていたとお聞きしましたが、全く物怖じするところがなく行動的な方でした。食通でもあり目新しい料理やお酒にチャレンジしては「あれはうまい」「それはまずい」と齒に衣着せず、批評する愉しげな姿が懐かしく思い出されます。小山市の文化財審議会の帰りには、必ず駅前の小料理屋に寄って舌鼓を打つのがお決まりで、私もお供させていただきますました。外見は庶民的なお店でしたが、酒・肴ともに一品でなるほど感心しました。

私が本学に奉職したのはここ八年ほどですので、常に先生を見ながら仕事をしてきました。授業・学生指導・委員会などいづれも先生に相談して、「いいでしょ」という言葉で安心しながら進んできたように思います。亡くなられた今でも、これは先生ならどう考

えるだろう、これは「いいでしょ」と言ってくれるかな、いやきつと難しい顔をされだろうな……などとい思いを巡らしてしまいます。これからもずっと酒寄先生は、私の基準でありつづけるのだと思います。ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

(菱沼一憲)

酒寄雅志先生は昭和45年（1970年）に國學院大學史学科に入学された。林陸朗先生を指導教授として日本古代史を専攻され、卒業論文では「奈良時代中期の対外関係」と題し、日本・新羅・渤海の交流を論じられた。これは後に改稿され、「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢―渤海との関係を中心として―」として『国史学』に発表された。学部卒業後は共立女子中学校に勤務される傍ら、法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻に進学して考古学の伊藤玄三先生に師事され、さらに一橋大学大学院社会学研究科後期博士課程へ進学して近世史・近現代史の佐々木潤之介先生の指導を受けられた。その間にも歴史学研究学会や朝鮮史研究会などに参加し、渤海史・東アジア史の論考を次々と発表された。昭和61年（1986年）、國學院大學栃木短期大学に日本史学科が開設されると専任講師として赴任し、以後はお亡くなりになるまで短大にて教鞭を執りながら研究を続けられた。

酒寄先生が1970年代以降の日本における渤海史研究を牽引した中心人物であることは異論のないところであろう。先生の渤海史に関する研究は平成10年（1

998年）に國學院大學に提出された博士学位請求論文『渤海と古代の日本』としてまとめられ、平成13年（2001年）には補訂の上で校倉書房より刊行された。酒寄先生の渤海史研究は関連史料の精緻な検証のみならず、考古学や文化人類学の成果も取り入れ、また東亜考古学会や鴻臚井の碑など近現代史の事象にも言及されている。また、酒寄先生の研究の特徴としては、積極的な現地調査の成果を上げることができる。昭和62年（1987年）に初めて渤海の故地を訪ねられて以降、韓国・中国・ロシアの遺跡を長年踏査され、現地の研究者との交流を深められた。

著書の刊行後は、それまでの渤海史研究に加え、円仁に関する論考も多数発表されている。平成15年（2003年）以降、國學院大學の鈴木靖民先生を研究代表者とする円仁の行程調査に研究分担者として参加され、その紀行文を『栃木史学』に発表されている。円仁は下野国（栃木県）の出身であり、栃木県と東アジアを繋ぐことは、酒寄先生のもう一つの研究テーマの柱となった。

最後に、筆者自身の酒寄先生との思い出を記させて

いただきたい。筆者は平成11年（1999年）に國學院大學大学院文学研究科前期課程に進学したが、大学院に非常勤講師として出講しておられた酒寄先生の渤海史に関する講義を受講し、修士論文では副査をお願いすることになった。当時、鈴木靖民先生を指導教授とする大学院の古代史ゼミでは、毎年の夏期休暇期間に2泊3日程度の国内巡見旅行をおこなっていたが、そこには酒寄先生も同行されるのが恒例となっていた。また、それ以外にも何か新しい遺跡の発見などがあると、酒寄先生は院生たちを誘って現地に向向かれた。今でも強く記憶に残っているのは、「勝示札」木簡が出土した石川県加茂遺跡の見学にお誘いいただいた時のことである。筆者は修士論文で「勝示札」木簡を取り上げたこともあり、現地の地形などを実際に目

にすることができたことに興奮して、見学後の食事の時も酒寄先生にずっと自説を開陳し続けてしまったのだが、酒寄先生は「今は話したくって仕方ない時期なんだよなあ」と少し呆れながら自分の話を聞いてくださった。大学院を修了した後はお目にかかる機会も減ってしまっていたが、もう酒寄先生と旅先でお酒を

飲みながらお話することもできないかと思うと寂しくてならない。酒寄先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

（中 大輔）